

禅の国際化と私の役割



国 安 大 智

アメリカ・禅コミュニティ・

オブ・ニューヨーク

(曹洞宗・秋田県・香最寺副住職)

されたが、とくに禅はその後の日本文化にはかり知れない大きな影響を与えて今日に及んでいる。この歴史的経過をたどるがごとく、日本の禅は東漸して、いまアメリカに開花している。

日本の仏教が、多数の北米移民をはじめ、白人に布教伝道を開始したのは明治三十年（一八九七）以降のことである。教外別伝、不立文字を標榜する禅は、教宗に立ち遅れ、曹洞宗についていえば、北米布教の拠点としてロスアンゼルス禅宗寺が建立されたのは三十年後の大正十五年（一九二六）である。

爾来、海外開教の先駆者磯部峰仙師をはじめとする先輩諸師の不惜生命の願行により、糾余曲折を経ながらも教線は逐次拡張されたが、不幸にも第二次世界大戦により一大頓挫をきたした。

戦後のアメリカは戦勝と豊かな生活、そしてテクノロジーの成功により、一時は優越感に酔っていた。し

奈良朝に伝來した仏教は、鎌倉時代に至つてはじめて庶民の仏教として眞の宗教となつた。

鎌倉時代の仏教は、禅と念佛にその教化形態が集約

かし反面、幾多の困難な問題に遭遇するとともに、人間性を無視し、人間を圧倒する文明社会のゆがみに直面し、人間の権威を回復し、客觀世界の比重を軽くしてゆく精神の転換が求められるようになり、その要望にこたえるものとして、隨處に主となるていの生き方を教える禅への関心が高まってきた。

こうした“禅ブーム”といわれるほどの禅への関心の高まり中で、日系社会とは独立して全米各地に曹洞宗、臨済系の禅センターが誕生した。

禅センターには二つの流れがある。その一つは、移民が護持してきた日本仏教を受け継ぐ日系米人のものであり、他は直接禅に結びついた日系以外の米国人のものである。

さて、日本語の通ずる一、二世の時代はどうに過ぎ去り、日本人といえども英語社会の市民となっている。したがって、いずれの場合も英語による布教でなければならず、その方法や内容も大きく変わらねばならない。日本の禅は日本の風土に育つたものであり、それがそのまま異質の土壤で伸びるわけではない。

そこで禅の国際化を推進するには、まずもって英語による布教可能の人材養成に具体策を講すべきである。さらには、言葉が違えば思考も行動もパターンが違う。子供の時からそのパターンを身につけてこそ、それぞれの国民性が形成されるのである。したがって日本社会に育った者を開教師として送り込むだけではキメ細かい布教は困難であろう。それで、禅センターで育成された外人僧に対し、日本における修行の途を開くことが肝要であり、日本国内に海外僧を受け入れる施設を設けることが必要であろう。

かつてロスアンゼルス禅センター（前角博雄師主管）のグラスマン徹玄師が両本山に拝登して瑞世の式を済ませたとき、それを紹介した「ロスアンゼルス・タイムズ」紙に、同紙の宗教記者チャンドラ・ラッセル氏が「仏教が米国で生まれ、育つた者によつて語られ、導かれる時に、仏教は米国人にもつとも近くなり、理解される」と記したというが、至言である。日本に伝

何かを模索し続け微力をささげたい覚悟である。

來した仏教が、入唐、入宗した日本僧によつて布教されてはじめて日本の土壤に遅しく成長したことを見れば当然のことである。

さいわいにして私は善光寺海外留学僧としてここロスアンゼルス禪センターに起居している。ここにはさまざまの過去・背景・国籍・を持つた二百有余名の人達が協同生活をし、共々に坐禪に励んでいる。それらの人びとの職業は雑多であり、その生活ぶりは、禪センターで働く人もあれば、街での職場にでかけるものや勉学にいそしむ者もあるが、彼らは一様に、坐禪は独りでもできるが、眞の修行には正師と、それに生活を共にする道友が不可欠であるとして協同社等を構成している。私はここにアメリカ社会に生きる叢林それは中国や日本における禪修行の原点を見るのである。

以上、アメリカの中での一禪センター内における見聞をもとに私見を述べたが、禪の国際化は今後急速に進展の一途をたどるであろう。私はここで学び得た知識と実践を生かし、禪の国際化に私の果し得るものは

本誌の表紙絵及び挿画は、
日本南画院副理事長・伊
藤毘三郎建築研究所社長・
善光寺檀徒総代伊藤毘三
郎（三毘庵）先生の揮毫
です。